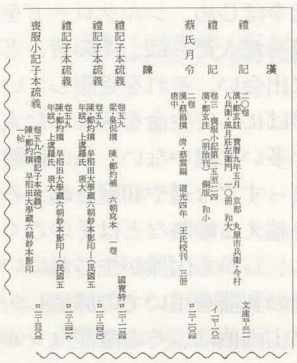

このほど、学内外からその刊行を待望されていた『早稲田大学所蔵漢籍分類目録』が、図書館より発行されました。百余年の星霜を経て、当館が受け入れ、整理してきたこれらの書籍は、世に誇るべき、かけがえのない宝であります。編集委員会では、この目録の作成にあたり、種々御指導を賜った先生方に、本目録によせる御言辞を、本誌に寄せて頂きました。

（ふみくら編集委員会）

私立学校と図書
―『早稲田大学図書館所蔵漢籍分類目録』の刊行によせて

土　田　健　次　郎
（文学部教授）

転居して本を置く余裕ができたと思ったら、すぐに溢れてしまった。思案の果てに、重複している本、あまり使いそうにない本、保存の意義が感じられない本を希望者にさしあげることにした。その話を知り合いの本屋さんにしたら、この頃は贅沢になったと若干咎めるような口ぶりをするので、ひとしきり弁明に努めた。

現在は本の溢れている時代である。私は本屋にいくのが娯楽の一つで、長時間店内であの本この本を開いている。店主にはたきをかけられるのがいやなので、顔なじみの店以外は、なるべく大きな本屋に行く。目立たないからである。前は本の回転が遅いので、新刊本書が新鮮に見えたが、この頃は陸続と本が出版される分、本がすぐに姿を消すので、少し前に出た本に気がいくことが多い。買おうかどうか迷っていた本はまだあるかな、などと。そういえばけっこう前の話だが、渋い小説をいれたところが魅力だった旺文社文庫がいつのまにか消えていた。油断ならないのは新刊が出ることではなく、あっさり本が姿を消すことである。

昔は本は貴重だった。中国では北宋の直前の五代という時代に印刷術が改良されてから、本の量が一気にふえた。一般にはこれで本が容易に目にしやすくなったと思われている。しかし北宋ではまだまだなかなか本は簡単には見られなかったようである。この時代に晁説之という代々蔵書につとめた家柄の出身で、文献にうるさい文化人がいたが、彼ですら経書である『春秋公羊伝』や『春秋穀梁伝』を見るために苦労し、やっと手に入れて書写している。南宋の大思想家の朱熹はこの話を引いて、一時代前は本を見るのがたいへんであった分よく読み込んだが、今は印刷書が豊富になったためその分読書がいいかげんになっていると学生を叱っている。品下って現代、今度の『漢籍分類目録』を見るまでもなく、早稲田にはこれらの本がごろごろしているのに、学生は手にとろうともしない。

ところで旧中国の私立学校と言えば書院であるが、近年この書院と図書との関わりが注目されている。それは主に書院が本を出版していたことに対するものであって、その実態が調査されはじめたのである。なお地方の公立学校である州学や県学も出版することがあり、これらはさしずめ大学の出版部のはしりであろう。

さてこの書院は、出版のみならず図書の収集にも力をいれていたようである。そして本がまだ見難かった時代、書院にある本の存在は魅力だった。当時州学や県学などの中には経史閣や蔵書閣といった図書館があったが、経済的基盤が不安定な書院での本の収集はそう簡単にはいかなかった。印刷書が豊富になったと言った朱熹でさえ、白鹿洞書院を復興した時、劉子和（靖之）の伝記を書い

てやったお礼として子の劉仁季から『漢書』をもらいうけ、それを書院に送り学生の閲覧の便を図っている。現在は『漢書』などいくらでも見られるのだが、当時この本を手にした学生たちの感激はひとしおであったはずだ。また科挙（上級公務員試験）に合格するにはかなりの書物に習熟しなければならず、かかる状態では富裕でない受験生が抱いた焦燥感は深かったであろう。そのような彼らが図書にも期待を持って書院に入ったとしてもおかしくはない。書院の教育理念は、科挙のための勉強を否定し自己陶冶を目指すものであるが、実際には書院で学んだ人間の中からかなりの科挙の合格者が出ている。それにしても早稲田の新図書館を見るにつけ、私立大学の蔵書がよくここまでになったものだと思う。特に何事につけ国立大学主導の形できた日本にあっては。

本が大量生産されるということは、その分消えていく本が多くなるということである。そこで図書館の保存機能が期待されることになるが、そのためにも目録は不可欠である。そして同時に目録は不足分を補充する目安にもなる。古典籍の場合、一度で完璧な目録を出すことなど不可能であり、いろいろ意見もあろうが、ここに閲覧のための検索の便とともに早稲田の漢籍の保存・収集の基礎が得られたことは慶賀の至りである。また、従来のカードにはかなりの誤りや不備があったがそれが訂補されたところがあること、叢書類の内容細目を丁寧に取ってあることはうれしい。限られた条件を考えれば完成までの8年の歳月は短かすぎるくらいである。福田望氏をはじめ担当された方々の並々ならぬ御努力に深く感謝したい。

我ハ是レ人間ノ一蠹魚
—寧斎文庫の周辺—

村　山　吉　廣
（文学部教授）

名著『島村抱月』などで知られた川副国基先生は長崎県大村中学の出身であった。私は生前の先生とずいぶん親しくさせていただいたが、ある時、「村山さん、いつか一緒に野口寧斎のことを研究しませんか、私は同郷なので義務のようなものを感じているのですよ」としみじみと語られた。寧斎は大村に近い諫早の人である。不幸にも先生は天寿を全うすることなく世を去ってしまわれたので、この話はそのままになってしまった。

寧斎は名は弌（いち）、字は貫卿、別号に滴天情仙（たくてん）があり一時期この号で雑誌「太陽」などに文芸評論の筆を振った。父の松陽は河野鉄兜（てつとう）門下の漢詩人であるが、大隈重信に知られて維新後、太政官少書記となった。このため幼い寧斎も父とともに東京に住み、番町小学校に入学し、成績優秀のため「神童」とよばれた。才気渙発で舌鋒するどく大いに有為の人であったが、病のため室内に起臥することとなり、ついに漢詩をもって世に立つことに意を決した。そうして昼夜をわかたず吟詠に努め、卓然として一境地を開き漢詩壇に重きをなすに至った。

詩は古体・近体ともに得意であり、近体でも絶句・律詩・長律いずれも行くとして可ならざるものはなかったが、詩風は清詩を旨とした。清詩の受容はすでに江戸時代に始まり梁川星巌が厲鶚（れいがく）の『樊榭山房集』（はんしゃ）を愛蔵し、頼山陽が袁放（えんぱい）の詩集を秘本としていたことなども名高い。明治に入ると森春濤が張問陶（もんとう）、陳文述、郭麐（かくりん）三家の七絶を選んで袖珍本を世に送った。すなわち『清三家絶句』である。これを機として明治の詩界は一斉に清詩時代に突入したといわれるが、寧斎も清詩に傾倒し、ことに清人の詩集の収集には力を注いだ。彼は家に数万巻の書を蔵したが、なかでも清詩のコレクションで人目を集めていた。書物は階上に置き、妹の曾恵（そえ）女がそれを忠実に整理整頓して、いつでも兄の意に添えるようにしていたという。

明治38年5月、寧斎に突然の死が訪れた。享年39歳であった。この年の秋、10月30日の日付で、その蔵書は早稲田に寄託された。これは父松陽と同じく、寧斎も大隈侯の恩顧を蒙っていた関係か

らだと伝えられる。寄託者は実弟で当時京都大学附属図書館長であった大島文次郎である。文次郎は初代岩手県令島惟精の養子となり、東京帝大文科大学を出た英文学者で華水と号した。後年、野口一家の苦渋を一身に背負いながら、ユーモアを失わずに悠然として生き「人生の達人」と評されたが、昭和20年10月に74歳で没した。「寧斎文庫」の名で知られているその蔵書は今回の目録では「凡例」の一に次のように示されている。

イ九　寧斎文庫（野口一太郎旧蔵）　五〇八部　四、九七一冊

当然のことながら、集部の第二、別集類の七「清初之属」から十一「近人之属」まではイ九の図書の目白押しであり、この方面の研究者の益を受けることは甚大である。もちろんこのコレクションが本学の世に誇るべきものの一つであることは言を俟たない。

かつて寧斎と綱島梁川、横瀬夜雨を並べて三大病詩人とよび、別に寧斎・子規を併称して二大病詩人と言った。病に侵されることなく自由に世に出ることができたならば、この人にはもっと多彩な活躍が期待できたであろう。いまその残された詩を見ると、そこには「烹文炊字閑生計／我是人間一蠹魚（文ヲ烹、字ヲ炊グ閑生計／我ハ是レ人間ノ一蠹魚）」の句がある。寧斎は剛毅の士で、病中にもかかわらず、周囲への気くばりを忘れず、漢詩三昧に生き抜いた人であったが、その心中を推しはかれば、満たされぬものが多かったろうと同情を禁じ得ない。

「漢籍」と本図書館刊の『漢籍分類目録』

鈴木啓造
（教育学部教授）

「漢籍」とは、漢＝中国、籍＝書、「中国書」と逐語訳できるが、なお加えて現代以前の、といったようなニュアンスがともなう。

王朝時代（辛亥革命以前）に中国で成立した書の総称とするのがまず基本的な目安で、そうした書物をいくつかまとめた、いわゆる叢書はその編集が民国以後に行われたものであっても「漢籍」に入れる。またそうした「漢籍」に民国以後現代に至るまでの人が注釈または論評を加えたもの、あるいは「漢籍」の影印復刻、さらには考古学的な収穫である木簡竹簡の類いもこの分類に入れる、というのがおおよそのところで、京都大学人文科学研究所の『漢籍目録』は大体こうした基準に拠っている。

しかし、民国以後の著作をも「新学部」という分類項目を設けてそのなかに入れ、一括して「漢籍」として扱っている東京大学東洋文化研究所の『漢籍分類目録』のようなばあいもある。

今回本図書館から刊行された『漢籍分類目録』には、しかし、右とは全く異質の基準が加えられている。それは書物の装丁ということである。背の部分を糸で綴じた線装本、いわゆる和綴じ本（厳密に云えば和綴じと中国の綴じとは違うが、便宜上こう云っておく）の漢籍を「漢籍」と分類規定している。

本の体裁を分類基準とした図書目録は、文庫目録や豆本目録等あるけれども、このばあいとは違う。

本目録の編纂がかなり進捗した段階で、私はこのことを知り、以来、装丁を目録作製の規準とすべきではないこと、万已むを得ずそうせざるを得ないのならば、「線装本」の三字を「漢籍」の上につけるべきことを主張してきた。

その後、刊行が予定よりもかなり遅れているようなので、他のことをもあわせて諸事訂正のための遅延であろうか、とひそかに期待していたが、空しかった。

こうした基準を知らない人がこの目録を見たならば、早稲田の図書館収蔵の「漢籍」の内容の貧弱さに驚くことであろう。本目録の凡例に当然この旨は記されているが、それでは不十分である。せめて本目録の表題に「線装本」の三字を加える

ことを、私は今でも主張し続けておく。

現行の中国書の体裁はもちろん洋式の装丁で、平装本（ペーパーバック）と精装本（ハードカバー）の二種類がある。しかし、豪華版となると伝統的な帙入り線装本という体裁をとる。毛沢東思想が中国大陸を風靡していたとき、その選集にも豪華版が作られたが、勿論伝統的な体裁をとった。但しこれは本図書館では購入しなかったらしい。

清朝の乾隆時代に大編纂事業の所産である四庫全書が成立し、まず紫禁城内の文淵閣に収められた。これが1983年にハードカバーの洋装本として台湾で出版された。本目録の基準によれば毛沢東選集の豪華本は本目録に収録され、漢籍の最たる後者は収録されないのである。

本目録の構成については他になお言うべきことがあるが、以上、最も基本的な点を指摘するに止めたい。

本目録の編纂について具体的な知識をもったのは、前述のようにかなり進行してからのことであった。そのとき、図書館には漢籍にくわしい人がいるのにこれに参画していないことを知って不思議に思ったことであった。今となっては本目録の編纂者は専門でもないビブリオの作製にさぞ苦心したであろうと、結果はともかく、同情を禁じ得ない点もある。

本図書館の器が一新して1年が経過した。図書館員が各分野の専門家として生長し職責を全うし得るような環境の設定について、野口館長に御努力をお願いしたいものである。

『早稲田大学図書館所蔵漢籍分類目録』の刊行によせて

岡　崎　由　美
（文学部助教授）

待望の『早稲田大学所蔵漢籍分類目録』が、このほど刊行された。中国学の末席に連なる者として、まことに喜ばしい。

本目録「跋」によれば、84年4名で作業を開始したが、新図書館の建設に伴う諸般の事情で、86年からは福田望氏一人で編輯作業を続けてきたという過程がある。福田氏をはじめ、厳しい状況の中で本目録刊行を推進してこられた図書館の各位に、心よりお礼申し上げたい。

本目録の選書の基本方針は、凡例にあるように、中国古典に関するもので、原則として宣統3（1911）年以前に成立の線装本（和刻を含む）である。それに、準漢籍と朝籍書の目録が、別立てで附されている。即ち、基本的には、「善本書目録」の体裁をとっていると考えてよいかと思う。

ところで、「漢籍」の利用ということに関して、この場を借りて、敢えて言及するなら、古典に関する排印本の位置づけということがある。現代中国で活字印刷によって刊行された古典の校注テキストや目録は、刊行年次から見ても、洋装本という形態から見ても、線装の古典籍目録には入れようがない。中央図書館での配架も、古書の破損を防ぐための物理的原因が主であろうが、線装古籍は古書資料室に、洋装排印本は地下の研究書庫に、という配置になっている。

ただ、中国学の分野では、本国での長い学術の伝統が、古典に校訂注釈を加え、それに考証を加え、さらにその目録を編むという形で知の遺産を積み重ねてきている。そして、現在でも古典の排印テキストは、この学術文化の延長線上にあるといえる。従って我々も、洋装排印本と線装古籍の両方を併せて展望する必要がある。

古典研究に際して善本テキストのみならず、後代の校注考証を網羅することで、学説の対照やクリティークを行ったり、研究史をより広く理解する助けとなる。場合によれば、詳細で正確な校勘・集釈を施された排印本がむしろ定本化し、それを核に歴代の各版本が有機的なつながりを生み出すこともある。また、古典戯曲などでは、「目録叢刻之属」に入る多くの価値ある目録が、この方面の研究の遅れから民国以後の出版となっているものの、個々の善本と併せて俯瞰しておきたい資料

である。善本書コレクションに、古典漢籍の排印本を補えば、研究する側にとって、学術的活用性はいっそう豊かになるといえよう。

もとより、これは、あくまで利用者として漢籍との係わりを述べたものであって、現実の厳しい環境における刊行事業に対して、その労苦に申し立てを致すものでは毛頭ない。目録刊行に参与された各位のご苦労と努力は、十二分にねぎらわれて然るべきである。

冊子目録の長所は、全貌の体系的俯瞰という点にある。例えば、巻末に附された朝鮮書と準漢籍の目録は、中国文化の影響を大きく受けた二国における、漢籍を媒体とした出版文化の様相を窺う資料ともなっている。冊子体の中に、収蔵図書の全体像が、その個性や指向性を伴って現れてくるのである。

データベースの利用は、書誌の照合・所蔵の有無・必要資料のピックアップなどに、大きな便宜をもたらしてくれる。漢籍も将来、データベース化されるだろう。だが、それで冊子目録が不用になるかといえば、それは決してないはずである。データベースは、やはり、明確なキーワードに対応して、特定のデータを引き出すのに向いている。そのデータは呼び出すつど、個々に独立したものである。早稲田大学図書館所蔵の漢籍には、どのような収蔵の特徴があるのか、各文庫の個性や、収書のプロセスをも彷彿とさせる有機的な全体像を描くのは、冊子目録であろう。いわば、図書館の顔である。今回の漢籍目録刊行によって、早稲田大学図書館の一つの顔が、明らかな形をなした。この大きな成果に、改めてお慶びとお礼を申しあげたい。

早稲田大学所蔵漢籍分類目録

1991年12月発行　B５版　596頁

本館の創設から1985年度（昭和60年度）まで百余年にわたり蒐集してきた漢籍の四庫分類による分類目録。準漢籍、朝鮮書も含まれ現在本館が所蔵している漢籍目録の集大成というべきものである。索引篇は後日刊行予定。

頒布価格

専任教職員・非常勤講師……１部につき無料。
２部めから15,000円。

学生・校友・学外者……15,000円。

問い合せ先：図書館総務担当

TEL 3203-4141（内)71-5014